

シベリア抑留

滋賀県 南部 高恒

私は、大正七年二月五日、滋賀県東浅井郡湖北町青

名に生まれる。ここは西に琵琶湖、東には歴史に有名な戦国の武将浅井長政の居城であった小谷山とのちょうど中間に位置する小さな農家の五男である。父南部米次郎は八十二歳で亡くなり、母は志氣といいい八十六歳で逝く。私には姉が四人いて、大変な子だくさんであった。当然のことながら長男以下は故郷を出て働くようになっていたので、私も速水尋常高等小学校を卒業するや兄たちのいる京都へ就職、繊維卸商で、当時はこの企業も私立青年学校があつて、早朝は軍事教練、夜は午後九時まで商業科の学科があり、多忙な毎日であった。

昭和十三年徴兵検査、十四年一月十日敦賀歩兵第九連隊第六中隊に入隊、初年兵第一期検閲が終わるや

北支江蘇省北地区警備につく。徐州付近の討伐及び鉄道警備。昭和十七年一月青島を出発、仏印に転進、同地の警備、約一年余りで私たち十三年兵のみ除隊、昭和十七年七月であった。当時国内は徐々に物資も不足してきており、特に繊維関係は商売思うようにならないため一部軍需産業に転じたのである。

昭和十八年八月、召集令状を受ける。三重県一志郡久居の連隊に入隊、一週間くらいで北海道根室へ、同地小学校で数日待機、海上穏やかになった早朝帆船にて志発島、勇留島ゆりに向かう。同島において対潜対空監視をしながら陣地構築が任務であった。昭和二十年八月十五日、監視所に勤務中終戦を知る。中隊本部に引き揚げてきたときは既に皆、舍前に整列していた。そして中隊長より伝達された旅団司令部よりの命令、軽挙妄動することなく公命を待ててであった。

終戦を告知されてより、中隊内のすべての書類の整理、つまり焼却処分の作業を連日やっていた。ソ軍に連行されようとは夢にも思っていなかった。九月三日、突如ソ連兵が島の北方から裸馬に雨がっぱをかぶせ口

笛を吹きながら我が兵舎に向かつて数騎が駆けてくる。兵舎前に着くや全員身体検査、時計はもちろん目ぼしい品は全部取り上げられてしまった。武器弾薬は舎前に山と積み上げられた。無念の涙が頬を伝う。

かくしてソ軍の捕虜となる。以下いよいよ抑留の記述になるが、残念ながら日付や場所が、記帳していた紙片をナホトカですっかり処分してしまったので、ここで記すことができませんのでお許し願いたい。

ソ軍に連行されたのは九月三日午後三時ころだったか、炊事には既に夕飯の支度ができ上がっていた。だれも声を発しない。これからどうなるのか不安で胸がいっぱいだ。ただ黙々と歩く。途中民家の前を通ったが、人影は見えない。三十分くらい歩いたろうか、島の小学校に閉じ込められた。出入り口に歩哨が立っている。かわやに行くにもついてくる。悔しいが、どうしようもない。夕やみが迫ってくる。だれ言うとなく、ああ腹減った。兵舎を出発するとき、釜いっぱい飯が炊けていたのに取りに行かせてくれない。とうとうその日は何も食わず、翌朝も昼食もなし、夕方になっ

てやっと炊き上がる直前にダバイダバイと海岸まで連れていかれ、折から雨が降ってきたので皆ばらばらと付近の小屋に入る。そのまま逃げてしまおうかと思つたが、後で皆の者に迷惑がかかるといけないので思つとどまる。潮の満ちるを待つて小船に分乗し沖に停泊していたかなり大きい船に移る。海軍の兵隊が乗つていた。そして国後島へ。ここでまた一週間。その間何回となく装具の検査をする。その度ごとに何か没収される。

八日目の晚九時ごろだったか、突然ソ連の兵隊がダモイ・トウキヨウと呼びながら整列させられ、一同大喜びで足元も軽く、途中の休憩ももどかしく港に着く。それから乗船、しばらくして北海道に向かつていないことが判明、がっかりする。急に空腹がこたえるが、どうにもならない。やっと午後になつて乾めんパンを何人かに一袋支給される。大泊港でさらに大型船に乗り移る。すると色丹方面より連行されてきた兵隊がいっぱいいる。ダモイ・トウキヨウにだまされて連れてこられた者ばかり。シベリア行きを観念する。ついに

ソ連領ソフガワニ港に接岸する。

埠頭に貨物列車が待つていた。牛馬が追い込まれるように、ぶうんと馬ふんのおいが鼻をつく。乗り終わるや中央の扉がガラガラビシヤ、外からガチャンと施錠の音がする。上段に小さな天窓がある。明かりとりはそれだけ。数分もすると友達の顔がわかる。にいつと笑うが何の反応もない。不安な気持ちがいっぱいだ。

九月も二十日過ぎになってるのだろうか、何日かわからなくなつてしまつた。列車が走り続けてやつと止まつた。森の中、我先に車両の下へ潜り込み、ウン、シヨンのためだ。すると、「発車するぞー」、突然のことで我先に乗り込む。全く変な国だ。何分間停車するか歩哨もだれも知らないなんて。幾日か走つて寒々とした森の中にとまる。丸太でつくつたさくの門をくぐると、やはり丸太づくりの舎屋が幾棟もある。各隊ごとに分かれて中に入る。下段、上段となつていて、上の段に入った。友達建部君と横になつて足を上げると天井の木に届く。したがつて移動するには腹はいにな

つて、ちよつとでも頭を上げるとゴツンと当たる。到着した夜は疲れと空腹で眠る。さて、これから先はどうなるだろう。

翌朝食事が上がる。待つてましたと喜んだが、それは日本の味噌だつた。ソ連側には調味料も主食も判別がつかぬらしい。作業に出る携行食は燕麦である。どうやら馬になつてしまつた。作業現場に着くと、すぐにたき火をし、飯ごうに一杯水を入れ昼まで煮る。すると白い乳液のようになる。それをすするので。これはほとんど水なので、数分後小便に行くと、スーつと一遍におながすいてしまう。

作業は今までに伐採したところの整理のようで、枝を切つたり、それを集めて燃やすのだ。きょうは雨がみぞれに変わつてきた。そろそろ空腹に耐えられなくてパンとメンソレータムや歯ブラシなど物々交換が始まる。これから先何年シベリアに抑留されるやもわからないが、きょう一日でも腹の虫がおさまればと、自分も肩章を一つ、ソ連兵の炊事場に忍び込んで、バター飯のにぎり一個をもらつて一とき腹に入れる。うま

い、何とも言いようのない味だ。今晚はよく眠れそう
だ。南京虫が出始めた。すごい数だ。手足首の周り、
出ているところはすべて食われる。朝になると赤くは
れているからたまらない。次の晩から、手に靴下を、
頭に旧軍隊で支給されたふんどしをすっぽりかぶり、
露出したところのないようにしてから少しはよかった。

次に夕食のパン受領。寝台から身を乗り出して分配
を見守る。一分隊十四人分に切ったのをさらに目方に。
中央に棒を立てて、てんびんをつくり、食事当番が公
平に分配する。

十二月に入ったのだろう、外は雪だ。ある晩突然、
舎前に整列、身体にどこか病気のある者は列外に出る
ようにとの命令で、この地で越冬できない者はダモイ
東京だと。ただまされると思いつながら友達と列外に
出る。翌日出発、どこへ行くのか全くわからないが、
貨物列車だ。走り出したらもう止まらない。二日くら
い走り続けてどこかの引込線に入って止まる。向こう
側のホームでソ連の民間人が働いているので、恐る恐
るかたわらへ近づいて、そつとポケットからメンソレ

ータムの缶を見せて、そこに積んである肥料用の豆板
と交換してほしいと、身ぶり手まねで意味が通じる。
丸いのを半分は割ってくれた。喜び勇んで貨車に戻り、
豆板を削りベチカでいつて食べる。香ばしく結構腹の
足しになるが、余りたくさん食べるとおなかを壊すの
で何日分にも分けて食べる。

三日目くらいか、ようやく停車する。土饅頭のある
畑の中で、中国の風景なので満州だと直観した。聞く
と牡丹江だそう。十二月になつていたのですごく寒
い。まして払曉の時間帯でもありませんが、土饅頭に
もたれて身体を震わせて虫の息。あちらにもこちらに
も寒さと空腹で数名が倒れ、帰らぬ人となつた。自分
たちは何でも食べていたのがよかつた。一キロも歩い
たらうか、赤れんがの建物で旧日本軍の師団司令部跡
だつたらしい。

日本軍の捕虜で弱兵の病院になつていて、ここでの
作業は炊事のまき取りだ。旧日本人の宿舍を片っ端か
らぶつ壊して木材を一本ずつ持ち帰り炊事場まで持つ
ていくのが仕事だ。病院なので毎日五、六人は亡くな

るらしい。春になるまで遺体が便所の建物にまきのよ
うに山積みされていた。

二十一年の正月も過ぎて少し春めいてきた。ある日、
ふと炊事の残飯捨て場にアリがえさをあさっているよ
うなので近づいてみると、何と牛の生首を指でせせつ
ている。余りにも情けないので、そのうちの一人に思
わず声をかけてとめたが、何の反応もない。ただうつ
ろに開いた目、だらりとした口もと、今日に至るも脳
裏から消えない。

二月に入って近く移動があると言う。もしかして日
本へ帰れるのではと、すぐそのように考えるが、なか
なかそうはいかない。突然装具をつけて整列だ、急い
で舎前が出る。四列縦隊に並んでいると、前から数え
てきて、ここまで前のトラックに乗れ、ここからは次
の車に乗れと。自分たちはまた貨車に乗る。東京ダモ
イだ。うそにだまされてソ満国境を越えたらしい、何
というところかわからないが、ハバロフスクの辺りだ
と。ソ連兵がつくったものと思われる洞穴式の兵舎が
三棟ほどある。とんとんと三段ほどおりると奥の方は

薄暗い。天窓がところどころにある。入って左側は土
でできた寝台がある。右側は丸太でつくり、二段にな
って、表面が削っていないからゴロゴロしている。皆
が草刈りに出る。下に敷く寝わらだ。馬小屋のようだ。
半分になった毛布を敷き、まずはやれやれ。敷き草が
まだがさがたと騒がしい。もうどうにでもなれとあき
らめる。各人の席が決まると、移動中も後生大事に携
行していた飯ごうと缶詰の空き缶に取っ手をつけたも
の二個を枕元に整頓する。今の我々には一番大切な食
器なのである。

シベリアの夜が寒々と明ける。わずかな朝食を済ま
し収容所出口に整列し、歩哨が何回か数を点検する。
三列縦隊でとぼとぼ歩く姿は哀れというほかない。前
後側面に一人ずつ歩哨が自動小銃を肩にかけてついて
くる。実に惨めだ。初めの間は伐採された木を二人か
三人で担いでトラックの積み込み場まで集積する。一
日じゅう同じことをやっていると嫌になる。ここに来
て数日すると、キノコが食べられる、草ではアカザな
ど作業の往復に持ち帰る。ある日、毒キノコを食べた

者がいて一晩じゅう何かわけのわからないことをわめいていたが、翌日作業から帰ったときには既に彼の姿はなかった。

某日夕食にカーシヤ、米飯のかゆのことで、水気も少なく量もかなりある。サケの薫製も上がった。なぜだろうと驚いていると、ソ軍の本部からの視察があった。将校が当日給与について質問があれば「ハラシヨ―」と答えるようにと、全くひどい国だ。日本人向けの糧秣も途中でかすめられて我々の口にはごくわずかしか支給されないということが分かった。

こんなことがあった。「コックリ」さんという占い。これから先どうなるのだろうかと不安な毎日なので稲荷大明神を呼び出して聞くのである。我々は日本へ帰れるだろうか、これが第一。それは今年中か、また帰れるのなら何月かなんて、作業が終わって帰るといつも十四、五人集まって、当てになるならんは別にして一ときでもかすかな望みを抱きながら眠るのだ。

この收容所も二カ月くらいで一応片づいたのだろう、トラックの移動で中隊本部と別れて一個小隊だけ森の

中の一軒屋。丸太づくりで、正面に出入り口が二カ所ある。段々がある。分厚い板の扉がギイギイバタンと風に吹かれてぶら下がっている。左側が歩哨の部屋になって、右へ回ってみると深いつるべ式の掘り井戸がある。便所となる建物はない。穴を掘ってアンペラが張つてあるだけ。厚手の板が穴の上に並べてかけてある。十二月に入ると氷点下三六度以下になる。三十度以下は仕事に出ないと言っていたのに全然そのようなことはない。冬期間は野で草もキノコもとれないのが一番つらい。

昭和二十一年十二月、雪が積もつて腰のあたりまである。すごく寒い。部屋の中の暖房はドラム缶が横に倒れてあつて一晩じゅう不寝番がまきをたくだけで、枕元はとても寒い。板張りの寝台に半分になつてしまった毛布を一枚敷き、上衣を頭からすっぽりかぶる。防寒外套を布団がわりに足元へかける。作業に出るときは上衣の上に綿入れの木綿製中国服を着る。靴下は、白ネルで日本のタオルくらいの大ささのものを二枚一組支給されているので、これを足に巻く。フェルト製

の長靴を履いて、寒いので湿ってこないから。

十二月三十一日、朝から風はなかったが、雪が降り続く。何本も伐採して最後の一本がどうしても倒れない。のこぎりがすっかり通り過ぎているのに風がないので倒れない。十一時でもまだ雪はしんしんと降り、帰ることもできず、明日は正月というのに、やつと朝になってそのままにして帰ってくるように許しが出た。今も忘れることはない、つらい一日であった。

正月も過ぎてから左手人さし指を切断負傷したので中隊本部送りになり、班内で週番の仕事をするように指示されて、皆が作業に出た後、舎内の掃除や暖房用のまき取り、食事分配など。指の負傷から一カ月くらいして包帯がとれた。この間一回も交換はなく、最初にヨウチンを流してぐるぐると巻いただけで治ってしまつた。

外の作業に出る。トラクターが集積してくるのを規定の寸法に二人でのこぎりで切るのである。帰りは材木を運搬するトラックの下へ潜り込み、しがみついて帰るのだが、晩の点呼のとき一人不在であることがわ

かり、後でその人は両手の指が凍傷であつたため十分つかまっていなかつたので途中転落して死亡したとのこと、かわいそうであつた。

きょうから道路作業に回される。スコップ、ツルハシを持つ者、山の斜面を削り、木材搬出のトラックが通れるようにする。新しく削り取つた道にタイヤがめり込まないよう、その幅だけ分厚い板を敷く。一人当たり何メートルというノルマがあるのだろう、五時ごろになると地方人らしい人が検視に来る。それが済まないと帰れない。時間が来ると歩哨が「ダワイ、ダワイ」と追いまくる。もうその時分になると空腹で思うように身体が動かない。木製のターチカ、日本の一輪車である、キーコキーコと足元もふらふらしながら何十回と低いところへ運ぶ。この仕事は腹も腰もしつかり踏ん張らないと途中でひっくり返つてしまう。お互い交代しながらやるのである。しつかりおなかに入つておれば叱咤されなくてもできるのと思ひながら。帰りにアカザという草、ちよつと渋味のある草で毒ではないらしい、これを帰りの道で採り、湯がいて握り

にして食べる。一時的でも腹の足しになる。翌朝の分も用意して枕元に置く。疲れていつか眠ってしまった。

きょうから材木を貨車に積み込む作業だ。かなり太いロープを木材の両端に回してかけ、反対側から三人か四人、両方に分かれて、掛け声をかけて引つ張るのだ。これも夕方になると力尽きて、もう一息というところで上がらなくなる。するとソ軍の歩哨が見かねて手をかすこともしばしばあった。我々の体力の衰えを痛いほど感じる。ここの宿舎は砂地に洞穴式であるためノミに悩まされ、一晩じゅう眠れない。どうして消毒しないのか、さつぱり分らない国だ。ここは約半月余りで中隊本部に合流し、二十二年六月ごろ、突然移動することになった。

右に行くのか左に行くのか、まさか日本へ帰れるんでは、なんて言っている。また列車にでも乗り込むなら、飯が上がらず一日じゅう走りつ放しになるのは目に見えているので、だれもが少ないパンを残すようにして草を食べて我慢するしか方法がない。

某日やはり貨車に乗り、どこともなく走り出す。ハ

パロフスクは通過した、夜中バイカル湖畔を通ったとだけかが話す。どれほどか走って停車した。全員下車命令が出て、不安ではあるが、ほっとする。いつもひっそりした森の中だが、きょうは少し様子が違う、ちよっとした町だ。イルクーツクという。ここの公衆浴場に行くのだ。いつからふるに入っていないやら。玄関で衣類を全部預ける。カウンターに金輪に通した衣類を置くと大きなポイラーに入れる。革製品を除くと、滅菌するのだ。その間に大浴場でおのおの仕切りの中へ入りシャワーを浴びる。終わって出てくると散髪屋がいて、出口で毛髪をすっかりそれ、顔見合わせて弱々しくニッコリ笑う。それでも何カ月ぶりなので気分がよい。下着が出てくると縫い目にシラミの遺体が黒く赤茶けて幾つもある。かゆみがなくなり、さつぱりする。

再び列車が走り出す。中央の扉のすき間から外の様子を見ると、砂漠の中を走っているようだ。何日かしてやっと、どこかわからないが構内に停車。ここで行きどまりらしい。下車して徒歩で砂浜を三十分くらい

歩いたか、少し高台になっている。登ってみると見渡す限り砂漠地帯である。すぐに収容所であることが分かる。鉄条網の中にプレハブの建物が三棟ほど見える。さくはかなり広く張つてある。すごく暑い。聞くところによると、カスピ海が近いらしい。クラスノボドスクとも言うが、平屋づくりで全部板張り、床もゴトゴトとせわしい。板の上に毛布を敷き一個分隊ずつ我が巢をつくる。長時間の輸送で皆疲れてほつとする。二年も捕虜生活で大分なれて、地べたであろうと苦にならないようになってきた。寒いシベリアから中央アジアの暑いところまで連れてこられた。

昭和二十二年八月、今までの森林地帯から一転して暑い暑い中央アジアで作業することになる。オノと鉄棒が渡された。徒歩で約三十分くらい行ったところに貝殻層がある。何百年か昔、この辺り一帯は海だったと教えてくれた。その海底に貝殻層があるのを発見し、これを起こして日本のブロックのように長方形に切りそろえて建築用を利用するというわけだ。厚さ二十センチもあるだろう。横から穴をつくり、鉄棒でぐ

いぐいしゃくつていると、畳ほどの大きさでごくごく浮き上がってくる。これを同じ寸法にそろえる。これは、オノでやる。夕方トラックが集荷に来る。手渡しリレーで積み込む。このとき何個積んだか数える。一人当たりのノルマが十五個、そのグループが大体五人くらいだから、一台積み終わると時間に帰れる。時計がないので、朝行つたラクダの先頭があるところまで来ると午後四時、ソ軍の歩哨の「ダモイ、ダモイ」で帰るのが日課になっている。何しろここは昼ばかりと言つてもいいくらいで、明るいうちから眠る。作業に行つても全く日陰がないのには閉口した。

何日かすると建築の方へ回される。左官の仕事なんてやったことがないので、うまくできるはずがない。三人一組になって何平方か積み終えて、夕方検視に来た者が、ここが曲がついているとわざと足でぶつ壊す。ブツブツ言いながらやり直した。できるまで帰つたらいかんと言う。つまり「プロホーラポーター」になる。このころになって、作業の往復に「アカハタ」の歌を合唱しながら現場まで行くようになった。空腹と疲

れで声も出ないが、日曜日をつるし上げが怖いから仕方なくついていくのだった。

このころになって日曜日は休みになる。当たり前だが、シベリアにいたときはめつたに休みがなかったからそう思う。この収容所に来てから確かに様子が変わった。共産主義の洗脳教育なのか、休日には必ず演劇やつるし上げがある。午後になると十人ずつくらいのグループになって、経営者側と労組員になって賃上げや待遇改善の問答式の討論をあちこちでやる。グループ中に一人はアクチーブの者が入っている。うっかりしたことは言えない。だれがスパイか全くわからなくなって、気を許して話ができなくて嫌な毎日だ。しかし日本へ帰るまでは何としても共産主義者の仮面をかぶってしようと、仲のよい友達とこっそり話し合っていた。

ある日の休日に、きょうは下の町にあるラーゲルの入浴に連れて行くから整列せよと、徒歩で三キロほどのところへ、砂地だから土ぼこりで顔は真っ白になってやつと到着。なるほど立派なもので、これも日本兵

の捕虜収容所なのかと信じられない。聞くところによると、すべて日本人が建てたのだそう。湯場がまた日本式で、浴槽があつてお湯がたつぷり入つて、久しぶりなのでとても感激してしまった。ソ軍の歩哨も「ハラショー」と一緒に湯につかっていた。浴室を出て屋外で皆のそろふのを待っていると、突然、滋賀出身の者はいないかと呼ぶので、自分だと名乗り出ると、黒パン一本をいただき、喜んで帰つたのを今日七十六歳になつても思い出します。何郡の方か分からないのが残念です。

ある日、舎外の壁に赤旗新聞が張り出され、日本兵が帰国を始めたこと、岸壁で迎えの船のタラップを上る姿をでかでかと報じている。果たして本当なのか、半信半疑で見ていたのを思い出す。しかし早い人はこの時分既に帰国が始まっていたのだ。

某日作業から帰ると、かねて入室していた「宇登野」という元伍長が亡くなったと告知された。だれの手で葬つたか不明のまま、私たちにはどうしてやることもできなかつた。

この収容所に来てから日本の方へ便りを出すようにとはがきを二枚ずつくれたので、一枚は本籍あてで、他の一枚はでたらめなあて名を書いて出した。そうしたら一枚は郷里の方に着いたので、初めて私の生存が確認されたらしい。医務室には大阪市の酒井先生がおられた。引き揚げ後、川西市の竹島さんと三人で酒井診療所で会食して、苦しかった思い出話が尽きなかった。

某日、戦車隊の兵隊一人逃亡したと夕方点呼のとき知らされた。何でもイラン方面へ脱出するつもりだったとか。赤旗新聞の日本兵が乗船している写真を見ると、もうしばらくの辛抱だのに、かわいそうに連れ戻されてソ軍の刑に処せられるだろうと暗い気持ちになる。

昭和二十三年七月ごろ移動があり、余り遠くでない町におろされた。タシケントというところだそうなの。我々は勝手に歩けないが、作業の行き帰りに、街角に果実でも売っているのか地方人の主婦らしい人が並んでいるのが見えた。

この地方はソ連の中では気候はよい方らしい。八月に入っていたか、突然作業中に前の広場に整列するよう歩哨が言ってきたので、またどこかへ行くのかな、と思っていると、ずうっと初めに見たソ軍の将校で少佐くらいのかなかなか立派な格好をしている、この将校の言うことは余りでたためはなかった。そして全員に新品の下着が支給されて、いよいよ東京ダモイだと伝えられた。しかし今までに移動するときは必ずこの言葉でだまされてきたので、すぐには喜ばなかった。それでも新しいシャツなんか支給されたから、もしかすると真実かもと幾分皆明るい気分になって、その夜は駅の構内の引込線で野宿する。

翌朝貨車が入ってきた。中ほどに炊事車がある。今度もかなり長い苦しい輸送になると覚悟する。どの車両にも扉のところニユーッと樋のように出ているのが目につく。これが便所のかわりらしい。午後になって発車する。走り出したらもう止まらない。炊事車に飯上げにも行けない。時々停車する。当番がそれと炊事車めがけて走って行く。三人目くらいで突然発車

する。もう行つたまま帰つてこれない。次に停車するまで待つしかない。昼食がとうとう夕食時になつてしまふが、釜が空いていないから一食ずつずれてしまふ。あれやこれやと何日かしてやつとバイカル湖畔を通過、夜のことなので外を眺めることもできない。少し冷えてきたので大分北の方へ来たという感じがする。タシケントを出発してもう一カ月にもなる。もちろん途中で引込線に入つて一日も二日も止まっていたときもあるから、なかなか時間がかかる。ナホトカに着いたときはもう秋になつていた。

日本へ帰る。今度は真実なのだ。夢でない。ナホトカの収容所にいる。それでもだれかが言う。反ソ的な言動がアクチープの連中に見つけられるともう一度シベリアへ送り返されて当分帰れない、スパイがいると小便していても、うかつに友達と話もできない。手帳やメモ類すべて処分する。皆必死になつていつ装具検査があつてもよいように身の回りを点検しているが、気分は浮き浮きしている。

いよいよ出発だ。足元も軽く埠頭までは急ぐ。着い

た。途中、まだまだたくさんさんの日本兵が黙々と仕事をしている姿がとても哀れで悲しい。

埠頭に各隊整列してまず目についたのは、「香り高い日本茶を召し上がれ」と白地の布に大書してあつた。今も鮮明に脳裏に焼きついてゐる。タラップを踏みしめて船倉に入る。夕方がいいりを上げる音がする。少しづつナホトカの岸壁を離れていく。だんだん遠くなつていく。苦しかったシベリア大陸、もう大丈夫、今度こそ本当に日本へ帰れるのだ。父や母は、兄や姉は、どうしているのだろうか、心は故郷へ。

二十三日昼ごろ舞鶴港に着く。船内ではまだアクチープの連中が、あたかも敵陣へ乗り込むかのように盛んにアジ演説をやっている。栈橋に上陸するなり皆が顔見合わせ泣き出す。涙があふれる。頬に伝う。まさに三年間の捕虜生活から解放された感激の一瞬なのである。

援護局での検査を順次終わり、北陸線高月駅までの切符をもらい京都經由で帰郷する。まだ両親は健在であつた。父は翌年亡くなつた。

振り返って、戦争とは愚かなり。無念にも再び祖国の土を踏むことなく逝った多くの戦友の冥福を心より祈るものであります。合掌。

終戦五十年近くの今日を迎えて

和歌山県 北 又 光 夫

戦後は既に五十年を過ぎようとしております。今思ひ出すことも嫌であるし、話すことはなおさら嫌である。けれども、軍隊生活の厳しさや、零下三十度、風速を加えれば七十度のソ連シベリアでの抑留生活のことなど、我が子孫に、また全日本国民のすべての方々にお伝えして、二度と私たちの味わった労苦をさせたくはないと思い、あの極寒の地から生きて帰ることのできなかつた亡き戦友たちの代わりに、有りのままの真実の話をお伝え申し上げたいのです。

私の生い立ちは、北又家の長男として育ち、生来車好きで、若いころから親類の運送店の手伝いで励み、

昭和十七年にトラックの運転免許を取得した。そのころから、軍隊に入れば自動車部隊だろうな、などと、我ながらに思い込んでいたものです。ところが、甲種合格。結果は歩兵部隊への入隊でありました。昭和十九年十月二十日、中部第二十四部隊です。

家を出るときは、両親に最後のあいさつのお礼をして、生きて帰れるという気持ちは全くないままに、十月二十一日の朝から、言わば戦時訓練としての厳しい軍隊生活が始まっていたわけで、分配された各服装ほか衣類種々などのことから、いよいよ満州行きだろうなと推察したものです。当時、後から知ったことではあるが、出迎える人は、満州からの尾形軍曹であった。十月三十日夜、二十四部隊の営門を出るとき、憲兵は馬で走り回っていた。道の両側はちようちん行列のような状態で、いっぱいの人で、我が子に会いたい人々が身動きできないままに立ち尽くしている。こちらは親に気づいても合図のしようもなく、口に表わし得ない厳しい状況のまま別れた。三十日夜、和歌山駅を出発してどこへ行くのかもちろん我々にはわかるはず